コンピート・メモリー

武市　あかね

午前七時半、池袋発の電車に乗った。
目的地は新宿。とても混んでいたので座れず、ドアの横に寄りかかって音楽を聴いていた。
今聞いている曲は、海外で公演され有名になった「ＣＡＴｓ」という舞台の中で使われている「メモリー」という曲だ。
なぜ私がこんな朝早くに音楽を聴きながら電車に乗っているかというと、今日は私の通う音楽学校で大勢の観客付きの歌の実技試験があるのだ。
その観客のラインナップは素晴らしいもので、名のある有名劇団から片田舎のレコード会社までたくさんの劇場が、掘り出し物を見つけようと目をらんらんとさせてやってくる。
同級生たちは私を含め、大体が歌手や女優・俳優のプロ志望なので、ここで成功すると試験終了後に声がかかり夢が叶う可能性が高い。なので、観客がいないのといるのではやる気は段違いで、ほとんどの人がこの日に合わせて声の調節やレッスンを入れている。そして、この「メモリー」という歌がこの試験の課題曲というわけだ。
家から出る前に発声練習もしたし、私は女優が志望なので歌に合わせる動作も練習した。しかし、家ではいつもと変わらなかったくせに、電車に乗った時から心臓が私の二十年の人生の中で一番早く鳴っているのが分かる。
その理由として、知らない観客がいるための緊張というのもあるが、何より悪いのは先ほどと逆に、もしここで失敗すると業界の人が多い分「あいつは使えない」というわさが瞬く間に広がり、将来がつぶれる可能性があるということだ。だから今回は試験を辞退し、来年に備えるという人も多い。
そんな中、私はこの試験を受けた。私がライバル視をしている相手が受けるからだ。
そいつは一日の大体の時間をバイトなどのプライベートに使っていて、大学に残って練習しているところを見たことがない。しかも授業に出ているときは、まじめに話を聞いているものの、ノートを取っているところも見たことがなかった。
そいつの名前は松沢夏花。何を隠そう小学校からの私の幼馴染だ。
彼女は何というか、変人とまではいかないがだいぶ変わっていて、昔から友人は大勢いたが、誰に対してもどこか壁があるように感じていた。私と彼女はどうも昔からそりが合わず、今まで話したのは二、三回しかなく、同じクラスになったことは一度もなかったはずだ。
彼女が私と同じ学校に進学するというわさを聞いた時は、誰かが聞き間違えたデマかいたずらか何かかと願ったが、その願いは悲しくも打ち破られた。
彼女をライバル視する理由は、もう一つある。彼女とは入試の集団面接で一緒だったのだが、彼女が入学志望理由を聞かれて、何と答えたと思う？　彼女はただ一言。
「面白そうだったからです。」
と答えたのだ。

それを聞いた面接官の人がとても不審な顔や苦笑をしていたのを、今でもとてもよく覚えている。私はこのとき彼女は絶対に落ちると確信したのだ。しかし、次の実技試験でそんな確信は覆される。

あの時の彼女は、歌はとてもうまいわけではなかったが、こう、何というのだろうか、彼女が歌いながら演技をすると、目が吸い付いて離れない。そう、離せないのだ。

どこか劇団に入っていたという話は一度も聞いたことはないし、私が勇気を出して尋ねた時も演技の経験はないと言っていた。そんなこともあって、正直彼女がやる実技試験もなめきっていた。

しかしあの時、彼女の順番が回り、演技が終わったあの時、私は、というかあの場にいた審査員含め全員の鳥肌が立っていた。そのうえ、演技が終わった後、試験なのに全員からの拍手が止まらなかった。私は試験が終わった後、会場のトイレの個室で泣いた。もし彼女の後だったら、私は自分の演技を彼女のと比べて動くことができなかっただろう。心の底から彼女の演技に惚れてしまった私が、嫌で嫌でたまらなかった。

今回の試験内容と一緒に、試験の順番を聞いたとき、動揺した。私は彼女の一つ前だったのだ。少しほっとしてしまったのがまた悔しかった。しかし、今の私はあの時の私とは違う。私は入学してから一年間、ただひたすら歌と舞台について勉強してきた。あの演技を超えられるとは言わないが、引けを取らないほど頑張ったし、歌に関しては私の方がうまいという自負がある。

あんな、授業もまともに受けないで、授業の後残りもせずにバイトに明け暮れるあの人と私では努力の量が違う。

「大丈夫、大丈夫、大丈夫……」

自信をもって家を出てからずっと自分に言い聞かせている。にもかかわらず、なぜだか不安が消えてくれる気配がしない。

はぁ、とため息をついているうちに、新大久保に着いた。新宿にはあと一駅で着く。丁度今は通勤ラッシュなので、大量のサラリーマンやＯＬ、中高生が乗り込んでくる。私服なのは見える限り私くらいだ。

いや、一人いた。私が寄りかかっているドアの反対側のドアに寄りかかっている。

よく目を凝らすと松沢さんだった。彼女は私に気づいていないらしい。

電車にいる人ほとんどがスマートフォンや音楽を聴くことに夢中になっている中、彼女は何かをしている様子はなく、ただただ外を眺めていた。

私がこんな緊張しているのに、全く緊張をしていない様子の彼女を見て、なんだか頭にきた。ただ一方的に敵視して緊張している私がばかみたいじゃないか。

しばらくして新宿についた。人の波に流されて改札へ流れつく。ウォークマンを外しながら学校に向かっていると、彼女が話しかけてきた。

「おはよう。いい天気だね。」

そうだね。

私がそう答えると、すぐ会話は途切れた。
他に答え方はたくさんあっただろうが、正直今は話しかけてほしくない。これからの試験に備えて集中したいのだ。そんなことくらい言われなくても察してほしいものだ。
イライラしたので、音楽を聴いて振り切ろうとウォークマンを取り出すと、
「音楽。いつも何を聞いているの？」
何を？　音楽の実技試験の前に課題曲以外を聴く馬鹿がどこにいるんですか？
「課題曲に決まっているでしょう？　あなたこそ、試験の直前に課題曲聞かなくて大丈夫なの？　ずいぶん余裕だね。」
感情に任せ顔も見ずにそう言いきり、少しどきりとした。恐る恐る様子を見た時には遅かった。彼女は傷ついたような顔をして黙り込んでしまった。さすがに申し訳なく思ったが、この後の試験のことを考えるとこのままの方が都合がいいので、出していたイヤホンを耳につけ、そのまま学校へ向かった。
学校について、少し説明を挟むと、すぐに一グループ目の試験が始まった。
五人一組で各パート十グループ。体育館の舞台でソプラノ、アルトの順でやり、私たちはアルトの二グループ目だ。教室で最後の確認に、「メモリー」を聴きながら口ずさんでいると、不意に寝ている人が目に入った。
こんな大切なテストの前に寝ているなんてきっと一人しかいないとは思いながらも見てみると、案の定松沢さんだった。
彼女はいったいどんな思考回路をしているのだろう。こんな、ほぼ人生をかけたような試験の前で寝ることができるなんて、もはや感心の域に達する。
そう思いつつ彼女を見ていると、突然、がばっ、と起きたので慌てて視線をずらした。
どうしたんだろうと気になったが、そのあとはピクリとも動かなかったので、試験に向けての最終確認を再開させた。
私たちの順番がきた。
トップバッターが終わり、私の順番が回ってきた。大きな返事をして試験用に割り振られた番号と、自分の名前を言って試験が始まる。
舞台上で歌われる「メモリー」で表現されるのは、ほかの猫に嫌われ続ける娼婦猫グリザベラが、初めに自分が美しく輝いていた時代を歌に乗せ、終盤に未来への希望を語られている。
この歌のポイントは、一番盛り上がる部分で一番美しく、役になりきって表現するのはもちろんのこと、どれだけ見ている人の心の芯にグリザベラのさみしく悲しい気持ちを訴えられる演技ができるかどうかだ。
よくある手として、試験内容発表時に見せられた模範演技とは違う、オリジナルの演技することだ。これがもし成功すれば、だいぶ成績にプラスされる可能性があるのは確かだが、失敗する可能性がとても高い、よほど自信のある人しかできない危険な賭けだ。実際そんなことをして大失敗した先輩も大勢いる。

私は、「わざわざ私がそんな危険な賭けをする必要性はない。声と演技に自信があればそんな真似はしなくても大丈夫なはずだ。」と考え、練習通りの演技をつき通した。結果は上々、観客の様子はまぶしく熱いスポットライトのせいでよく見えないが、審査員の反応はそれなりによかった。少し安心した気持ちで彼女の番に移る。

伴奏が流れ始めた。彼女が歌い始める。案の定演技はグリザベラの動きを完全になぞる完璧な演技だが、歌の方はなんとも、ハリがなく、心なしかとても小さめに感じる。これは確実に勝った。そう思った瞬間、彼女の演技が百八十度変化した。

彼女が授業中に行っていたのは、模範を端から端まで完璧になぞる演技だったが、途中から模範の演技を無視し、声の音量も違う、オリジナルの演技を入れてきたのだ。

模範の演技を繰り返し見ていた私にとっても審査員にとっても違和感しかなく、初め何を表現しているかわからなかった。が、しばらくして、これは本来グリザベラが、未来への希望を語った後、この先同じように、過去の輝きに縋り付いて生きねばならない絶望を表現するところを、彼女は一貫して絶望を表現しているのだ。

これは「ＣＡＴｓ」のストーリーに大きく反することで、実際の舞台でこんな演技をすれば、後の話につながらない。試験の評価にも大きく響く危険な賭けだ。

しかし彼女はそこから、模範の演技とは比べ物にならない美しさと、ほぼ地声だが頭の奥を直接殴ってくるような、セリフのような歌声を見せた。

それはまるで演じているグリザベラではなく、彼女自身が「私は未来の希望を歌うような役じゃない！　絶望を表現する役の方があっている！」、そう言っているように私の芯を殴ってきた。

しばらく見ていると、一度だけ彼女と目が合った。彼女は役に入っているらしく、苦々しい絶望を浮べ、口の端を少し上げた。

『お前と私では舞台が違うんだよ。』

そう目で言われたように感じた。

勝手に彼女を敵視し、朝の彼女を見て彼女に対する警戒心に少し余裕ができてしまった分だけ、私は恥ずかしくて仕方がなかった。もちろん、彼女にはそんなことは言ったつもりはなかったため、試験が終わった後、席に戻った彼女から小声で、

「お疲れさま。」

と声をかけられた。私はもはや意地を張る気力もなくし、

「お疲れさま。」

と返した。

完敗だ。あれだけ頑張ったのに、私より努力をしてない彼女に負けた。

そもそもの試験の趣旨を間違っていた。この試験は、どれだけ完璧に課題をコピーできるのかではなく。観客にどれほど自己アピールできるかが主な目的であり、模範通り完璧にやったとしても、学校の成績はいいだろうが、そんなの大人数の演技の中に埋もれるだけだ。

勝てる気がしない。勝てると思う要素が何一つない。

試験がすべて終わり、体育館を出ると、彼女には五、六社有名な劇団から声がかかっていたのに対して、私には一社もなし。私はその場にいるのが耐えられなくなって、駅へ向かった。
家についてベッドに倒れこんだ。
しばらく何も考えずにごろごろして、落ち着く体制になると、試験のことが思い出された。
今思い出しても嫌になる。甲乙はつけられていないが、負けたことなんてガキでもわかる。
悔しくて悔しくてたまらなかった。
才能ないのかな、私。
才能がないのなら、無駄にお金がかかる学校なんかやめて、就職をした方がいい。
専門学校を中退し普通の四年制大学に入らずに就職をするなんて無謀に近いが、もしやめるならそれしかない。本気でそうするなら歌もやめた方がいいだろう。けじめがつかなくなって、何事もおろそかになってしまう。
ああ、本当に嫌だ。今でも頭の中に残っている。プロの舞台を見たような感動が響いている。
頭の中にあの表情が、彼女の歌声が響いて、響いて響いて響いて響いて響いて響いて響いて響いて響いて響いて響いて響いて響いて響いて響いて。
「うるっさい！」
と叫ぶと、彼女の歌声は頭の中じゃなくて外から聞こえていることに気が付いた。窓を開けると彼女は走っていると同時に、音楽を聴きながら歌っていた。
なんて近所迷惑な奴。そう思ったが、彼女の声は走っているはずなのに、その歌声は試験の時の歌声にも及ぶ、なんともきれいで心に響く歌声だった。
彼女は二階から自分を見つめている私に気づき、足を止めイヤフォンを取り、
「何か用？」
と、大声で話しかけてきた。
私はそこで待っているようにサインをして下へ降りた。
「何か用？」
彼女は私に再度聞き直した。
朝のことなど忘れているかのような対応になんだかまた別の部分で負けたような気がする。
「毎日こうやって走っているの？」
そう尋ねると、彼女は思い出すようなふりをして、
「多分、毎日かな。時々気分が乗らなくてやらない時もあるけど。」
彼女は当たり前のように答えた。
走りながら大きく声を出すというのは、一見簡単そうに見えて実に過酷だ。体は酸素を欲しているのに、口から大量に吐き出され、息を吸う時間も一瞬だからだ。そのうえ走っていない時と同じような歌声を出すなどほぼ不可能に等しい。
毎日、毎日彼女はこんな過酷な練習をしていたのか。
「試験前の授業ではあんな演技していなかったのにいきなりあれだけできたってことは、

この時間にあれを練習していたんだね。」
「ううん。音楽聞きながら寝ていた時に突然思いついちゃって完璧に一発勝負だったよ。演技、変だったかな。」
そう聞かれて苦笑した。
「演技が下手だったのにあんなたくさんの劇団から声をかけられるなんて、ありえないでしょう？　みんなとても感動していたよ。」
彼女はふぅんと言った。
そんな彼女を見て、私は深くため息をついた。
「あんなにうまくてうらやましい。アドリブで本番に挑むなんて度胸私にはないし、努力したのに一社も声がかからなかった。才能ないのかな。」
そう言って笑うと、彼女は少し考え込み、頭に散らばっている言葉を一つ一つ拾い上げるように話し始めた。
「私はね。この世で称賛を受ける人々の中には三つのパターンがあると思っているの。一つ目は初めに努力で伸びて、途中から才能で伸びる人。二つ目は初めに才能で伸びて、途中から努力で伸びる人。三つ目は努力と才能が並行して伸びる人。いずれにしても才能は必要だけれど、努力も必要でしょ？　あなたは今才能がないと思っていても、今はまだ気づいてないだけで、このまま努力していけばいつか気づく日が来るんじゃない？」
まあ半分くらい本で見たんだけどね、と言って彼女は笑った。私はそんなまじめに返事をしてくれると思わなかったし、その答えも予想外だった。
「あ、ごめん。もうすぐ寮の門限だから帰らなくちゃ。じゃあね。」
そう言って彼女は走り去っていった。
何だろう。なぜだろう。何で彼女と私はこんなにも違うのだろうか。
スタートラインは彼女の方がだいぶ上だったからせめて追いつけるように、努力したはずなのに一歩も近づいていないどころか、十歩も百歩も差を広げられているような気がする。
ああだめだ、涙が溜まってきた。このまま泣いたらさらに負けた気がする。
どうせなら。そう思って一瞬家に戻り、音楽プレイヤーと少しのお金と鍵をもって、私も「メモリー」を歌いながら走ってみることにした。
スポーツシューズに履き替えて、耳にイヤフォンをつける。しっかり準備体操をして、走り始めた。

デイライト。夜露を払い、花は甦る夜露のように。待とうよ、夜空のかなたから現れる明日を……
メモリー。月明かりの中、美しく去った過ぎし日を思う。忘れないその幸せな日々。思いでよ還れ……
お願い。私に触って私を抱いて、光とともに、わかるわ、幸せの形が、ほら見て明日が…

…

そうしばらく走っているうちに、ふと、涙が消えていることに気が付いた。その代わりに芽生えていた感情は、楽しい。そう楽しいのだ。歌うことはとっても楽しいのだ。

何をいまさらと思うだろうが、歌うのを楽しいと思うのは随分と久しぶりだった。

ああなんてこと。私は随分大切なものを忘れていた。歌うことが楽しいだなんてこの道を目指さなくとも知っていることだろうに。

そうだ、私は彼女に勝つためでも、学校の試験でいい成績を残すためでもなく、ただ好きなことをしたくて、いつか見た輝かしい舞台にあこがれて、私と同じような経験を、私の演技を見て他の人にもしてほしくてこの道に入ったのだ。

きっと私は今日というこの日を絶対に忘れない。たとえこの先思い通りに声が出なくてスランプに入っても、たとえ他人に才能がないからやめた方がいいとどんなに言われても、自分で生きていける限りもう決してやめようだなんて思わない。

いつか見たテレビ番組で言っていた。この世に名を遺す偉人たちが、死ぬ直前に思い出す記憶は、その人が偉業をもてはやされた記憶ではなく、自分が一番つらかった記憶。人生でほかの人より数倍努力した記憶。人生で充実感を抱いていた記憶。その三つが重なる時期だという。

私は偉人と呼ばれるほど大それたことはしていないし、これからも目指すつもりはないけれど、私が死んだとき思い出す記憶はそんな記憶がいい。自分が他人より努力して、自分の力で走っている、そんな記憶がいい。

気がつけば夕日が傾き、あたりは茜色に染まっていた。そろそろ夜がやってくることを知りながらも、なお走り続けた。

ああ楽しい。こんなにも疲れているのになぜ楽しいのだろう。何であんなに泣きそうだったのだろう。歌はこんなにも素晴らしいのに、こんなにも幸せなのに。

この道を目指した理由も忘れ、悲しみと悔しさに浸っていたあの時間がばかみたいだ。

私は歌いながら町内を何週も回った。あの時のことを思い出すと、私はあの時自然と泣いていたかもしれない。もしかすると大笑いしていたかもしれない。覚えているのはあの時間があったからこそ、その後のどんなことがあっても踏ん張れたんだと今でも思う。

翌朝目が覚めると、いつの間にか家で風呂も入らず大の字で寝てしまっていた。

後日、町内から苦情の電話が止まらなかったのは言うまでもない。

舞台「ＣＡＴｓ」で歌われる「メモリー」より、日本語訳一部抜粋。